

超少子高齢社会という情勢において、理学療法には、治療的介入と予防的介入の両面からの対応による、国民の健康や生活の質向上に向けての貢献が求められている。このような中で、安全で効果的な理学療法を実践していくために理学療法士の力源となるものは、対象者の健康や生活の質の向上を願う熱意と、自身の専門性の向上を追求し続けるプロフェッションとしての自律的な向上心である。

その志を具現化するための第一歩は、対象者の臨床的、心理・社会的特性と、自身が実施した理学療法の内容、そして、その結果に関する正確な記述と振り返りである。このような臨床活動の記述と振り返りという能動的な学びが継続されなければ、臨床実践の経験は、個々の理学療法士の記憶の引き出しの中に、無形の「暗黙知」としてとどまることになる。そこで、理学療法における臨床実践の経験的事実を、可能な範囲で「形式知」として明示化し、経験科学という枠組みの中で体系的に整理していくことが、生涯学習における重要な礎となる。この臨床実践の形式知化を通して、評価・治療・指導方法やその効果に関する疑問などさまざまな臨床的疑問 (Clinical Question : CQ) が生じることになる。

日々の臨床実践から生じた CQ を解決するためには、CQ に関連したエビデンスの内容、自身の臨床能力 (知識、技能、経験則)、施設の設備・環境と、対象者の意向や価値観との折り合いをつけながら最適な臨床判断を行うための行動様式である「根拠に基づく理学療法 (Evidence-based Physical Therapy : EBPT)」を地道に実践していくことが重要となる。日常の臨床活動において、CQ に関するエビデンスも参照しながら¹⁾対象者に対峙していく中で、次なる疑問が生じることになる。それは、より深く、より科学的に、臨床像を把握したり、理学療法の効果を検証したりするための評価方法や、より安全で効果的な治療方法、指導方法を考究する過程で派生してくる研究疑問 (Research Question : RQ) である。このように日常の臨床活動から生じた CQ と EBPT

の実践、そして、その実践結果との照合から生じた RQ を解決していくためには、正しい「研究法」の理解に基づいて、妥当性と信頼性のある臨床研究を地道に積み重ねていくことが、極めて重要な課題となる。

本書は、編者や筆者の方々の長年にわたる臨床経験と研究実績を基盤として、理学療法士が、日々の臨床活動の中で CQ や RQ に直面したときに、臨床という大海原で、臨床研究の針路を正しく進んでいくために不可欠な「研究法」というナビゲーション (航海術) の全容が、とてもわかりやすく示されている。海図としての本書の内容は、臨床研究の概念・哲学にはじまり、研究デザインの分類と実施上の要点、研究倫理、測定機器の特性と実際の測定方法、臨床例を題材とした統計解析の具体的な進め方、研究成果の学会発表や論文文化の要点、そして、国際誌への投稿方法までが、図や表も活用しながら、とてもきめ細やかに、そして、包括的に解説されている。特に、研究デザインや統計学などの章において組み込まれた「Case」というコーナーでは、代表的な神経疾患や運動器疾患など具体的な理学療法の事例が紹介されているため、理学療法における臨床研究の実際をとてもイメージしやすいように工夫されている。また、要所に記された「用語解説」のコーナーでは、臨床研究を進めていく上で鍵となる用語がわかりやすく解説されているため、研究法を理解していくための大切な道標になっている。

本書の理解を通して、次代を担う理学療法士の皆さんが、エビデンスを使う臨床活動と、エビデンスを作る臨床研究活動というものを一体化させていくことの本質的な意義をしっかりと感じ取られ、そして、自律的な生涯学習を通して、わが国の理学療法の質を高めていくための力源として活躍していかれることを心から期待したい。

(A5 判 頁 296 2017 年 定価 : 本体 3,000 円 + 税 [ISBN978-4-260-03227-8] 医学書院刊)